

らの示唆によると解釈できる」としたが（広重・西尾の引用文はいずれも西尾成子編『広重徹科学史論文集2：原子構造論史』みすず書房、1981年より）、パイスの説明ではプランク輻射論との直接的な関係には触れていない。広重・西尾が発した諸論点は欧文でも発表され、とくに量子化条件にかかる点はJ. L. ハイルブロン、T. S. クーンによる1969年論文（“The Genesis of the Bohr Atom,” *Historical Studies in the Physical Sciences*, 1969, 211-290）の見解と異なるため、広重はクーンと直接議論を行っている。しかし、これは致し方ないことだが、本書では、クーンらの論文だけを参考文献に示し、広重らの見解に配慮した記述は見当たらない。もちろん、パイスは大部な著作を複数もつ著述家ながら、理論物理学者であって、科学史研究者でないことは考慮されるべきである。それだからこそ、邦訳では上記のような諸論点への注記が付加されてもよかつたようだ。

科学史研究の視点から種々の指摘があるとしても、本書は原著から忠実に丁寧に翻訳された優れた訳書である。副題の「物理学・哲学・国家」が示すように、様々な角度からボーアとその時代が語られる内容を丹念に翻訳することはきわめてたいへんな作業だったと思われる。また、ボーアに熟知した訳者たちゆえに、訳語や人名・地名の表記などにもたいへん工夫が見られる。こうした丁寧な「原子の父」ボーアに関する邦訳を、彼の原子構造論100年という時期に、そして、3.11以後の原子力をめぐる変動期のなかで世に送り出した訳者たちには賛辞を送りたい。なお、訳者の一人、西尾によって著された『現代物理学の父ニールス・ボーア：開かれた研究所から開かれた世界へ』（中央公論新書、1993年）も、コンパクトながら名著であることは間違いない。ぜひ、併せて読んでいただきたい。

（小長谷大介）

スティーヴン・ナドラー（有木宏二訳）『スピノザーある哲学者の人生』人文書館、2012年3月、630頁、ISBN 9784903174266、定価6,800円+税。

著者のスティーヴン・ナドラーは、現在ウィスコンシン大学マディソン校のユダヤ学の教授であり、スピノザに関する著作だけでも共著をあわせると5冊、哲学史の分野で単著をすでに8冊出している。また、プリンストン大学のダニエル・ガーバーと共に *Oxford Studies in Early Modern Philosophy* を編集しており、*Journal of the History of Philosophy* の編集者でもあるナドラーは、世界的な初期近代哲学史の専門家である。本書は、1999年にケンブリッジ大学出版局から発行され、すでにその分野においては必読書としての地位を築いている *Spinoza: A Life* の待望の日本語訳である。

ナドラーは、リュカスとコリュレスによる17世紀後半と18世紀初頭に書かれたスピノザの伝記を参考しつつ、多種多様な記録資料と照らし合わせてその人物像を浮かび上がらせるに成功している。また、近年のスピノザ研究、特にユダヤ教との関係についての研究の成果を思想・文化面において包括的に取り込んだ読み応えのある伝記となっている。

カバラ・象徴的である12章から構成された本文は、包括的にスピノザの生涯と思想を扱っている。構成上のスキーマとして、この12章は2部に分けることができるのではないかだろうか。第1章から第6章までは、スピノザのユダヤ人としての背景を描き出しており、スピノザのユダヤ人共同体からの破門をもってその幕を閉じている。第7章から第12章は、ベネディクトゥスというラテン語の名前で活躍した哲学者スピノザの姿が、その思想とともに描き出されている。

ユダヤの背景を根気よく描き出した第1部では、16世紀後半から17世紀にかけてのオランダにおけるユダヤ人共同体の起源や、その共同体内部での宗教・文化的教育について、スピノザがアムステルダムのユダヤ人商人の子として生まれた事実以上の知識を持たない読者の理解が深められる。ユダヤ人でもある著者のナドラーは、第1章で、スペインからユダヤ人が追放された1492年から、移住先のオランダで共同体が繁栄し始めた1630年代までの歴史を、当時の政治・文化的背景に配慮しつつ描き出している。第2章では、

スピノザの父であるミカエルと、アムステルダムのユダヤ人共同体の中心的な人物であり、スピノザ一家がネーデルラントに移住するきっかけをつくった大伯父アブラハムが取りあげられる。第3章では、1630年代に入り、より複雑化するユダヤ人共同体の姿が描かれている。スピノザが生まれたばかりの頃、共同体は二人のラビの神学的論争を通して、成立後最大の内部危機を迎えた。カバラの影響を受けたラビ・アボアブと、長期にわたってアムステルダムにおける共同体の精神的支柱であったラビ・モルテーラとの、イベリア半島に残された隠れユダヤ教徒たちの魂の救いを巡った論争がそれである。この論争を端緒に、3つに分割されていたポルトガル・スペイン系のユダヤ人の共同体が一つに統合され、モルテーラを最高位のラビとする共同体のアイデンティティが確立されていった。第4章では、スピノザのユダヤ教学校における教育が詳しく述べられている。第5章は、スピノザが家の都合で上級学年（1649年頃）での学びを始める前に、商人としての仕事を始めなくてはならなかった経緯について記している。商人になったあとも、スピノザは共同体の「イエシヴァ」（学塾）に通うことを通じて学問を継続させていた。しかし同時に、ユダヤ教の伝統的な学問はスピノザの探求欲を満たすことはできず、彼を元イエズス会士であったフランシスクス・ファン・デン・エンデンのサークルに引き寄せていく。この出会いがスピノザをデカルトの著作と引き合わせ、急進的な政治思想を養っていくという興味深い仮説を、ナドラーは披露している。スピノザの破門について書かれた第6章には、共同体との接触を禁じた極刑であるヘレム（cherem）についての詳しい説明を見つけることができる。紀元200年頃に成立したミシュナーや12世紀のマイモニデスの記述を通して、ナドラーはユダヤ教の中での破門の位置づけをしていく。スピノザの「破門」についての最大の疑問は、なぜスピノザへの破門文書が他の破門に比べて偏見に満ちており、その激情において他を凌駕していたのかということである。単純にユダヤ教の行動規範からの逸脱や、キリスト教徒の施設に通い知的交流をもっていたことが、その理由とは考え

にくい。ナドラーの仮説は、スピノザが1655年から1656年にかけて、魂の不死性とモーセ五書の神的由来を否定しており、それが指導者たちに知れ渡っていたからだとしている。そしてこのスピノザによるユダヤ教の中心的な思想の否定が、破門文書に記されたヘレムの直接的な理由となつた「異端思想」と「邪悪な意見」であったとナドラーは主張している。

第2部とも呼べる第7章から第12章では、ユダヤ人共同体を飛び出したラディカルな思想家スピノザの思索と、知のネットワークの展開が詳しく描かれていく。第7章は、彼らの持つ終末思想のゆえに、ユダヤ教徒を改宗させようと熱意をもって活動していたクエーカー教徒たちとの交流が記されている。クエーカー教徒に加えて、当時の文脈において異端的なコレギアント派やメノーナ派のキリスト教徒たちと関係を持ち続けたが、生涯改宗することなく、ユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなかつたスピノザは、ある意味、最初の近代的ヨーロッパ人であったといえるのではないだろうか。この異端的なキリスト教徒たちや、ライデン大学での聴講を通じ知り合った友人たちとともに、独自のデカルト哲学解釈を育んでいく。このスピノザ・サークルの中には、後にスピノザの著作を出版することになるヤン・リュウェルツゾーンやその急進的な思想のゆえ政治的な弾圧を受けたアドリアーン・クールバハ、そして古典学者であり劇作家でもあった医師のロデウェイク・メイエルなどがいた。第8章では、英国王立協会の事務長として活躍するヘンリー・オルデンバーグとの交流や、初期のスピノザの思想を明らかにする『神、人間および人間の幸福に関する短論文』について詳しく記されている。第9章では、世にスピノザの名を知らしめることになった『デカルトの哲学原理』の出版の経緯が明らかにされている。また、出版自体は遺稿集のなかに含まれることになったが、常にスピノザの思索の中心を占めていた『エチカ』の1660年代以降の発展史が多くの資料を使って詳細に記されており、スピノザ哲学の根幹が明らかにされる章である。第10章は、もう一つの代表的な著作である『神学・政治論』を扱っているが、特に執筆のきっかけに

なった共和主義のデ・ヴィット派と君主制に近いものをもとめるオラニエ派との政治闘争について詳しく述べている。ナドラーは哲学研究者としても輝かしい業績をあげており、この伝記の中でもスピノザの難解な著作を明確にしていく分析が素晴らしい。第11章では、ホップスを含めた『神学・政治論』への反響や、ライプニッツとの本心を隠しながら行われた知的交流について書かれている。また政治闘争の一部としての保守的なカルヴァン派の神学者たちと、コッケイウス派と呼ばれたより寛容な神学グループとの軋轢にふれている。最終章では、あまり注目されないスピノザの『ヘブライ語文法綱要』の内容が説明されている。また、同様に遺稿集に含まれていた『国家論』の内容も紹介されている。そして生来体の弱かったスピノザの、あっけない最後を坦々と描き、ナドラーは本書を閉じている。

本書はスピノザの伝記として一級品であり、訳文としても素晴らしいものである。ただナドラーのスピノザ理解には、いくつか疑問が残るところもある。なかでも著者は本書の中で必要以上にスピノザの思想、特にその政治思想を近代的な自由主義として理解するくらいがある。これは、最近の研究、特にジョンズ・ Hopkins 大学の Yitzhak Melamed らによって批判されている点であり、今後の議論に注目が集まる。また、スピノザのユダヤ的な要素が前面に押し出されるあまり、当時のスコラ的なデカルト主義者たちから受けた影響を過小評価する傾向がある。『神学・政治論』は聖書をあつかった著作であるから、たしかにユダヤ人共同体で受けた教育の影響を理解しなければ解釈は難しい。しかし、学者としてのスピノザが常に對話をし、また反論を呈していたのはユダヤ教ではなく、デカルトに影響を受けた当時のスコラ主義的神学・学者たちであった。なかでもその著作がスピノザの蔵書目録にも含まれており、『エチカ』『神についての小論文』『形而上学的思想』でも幾度か引用されているヨハネス・デ・レイやヨハネス・クラウベルクらへの言及が少ないので物足りない。近年特に、スピノザの思想の形成において重要視されるこれらの思想家との関係への言及も、スピノザの伝記としては

必要な部分であろう。

最後に日本語訳についてすこし書いておきたい。いくつかの有名な哲学者の伝記があるなかで、本書は日本語としての文章が素晴らしい。訳者の荒木宏二氏はすでにナドラーによる『レンブラントのユダヤ人—物語・形象・魂』(人文書館、2008年)を訳出しており、ナドラーの文章にはなっているのである。ナドラーの本文自体が読みやすい英語で書かれているのも理由になっているとは思うが、文体に気を使われた訳者の労をかいま見ることができる。ただ時折、固有名詞の表記が常用されないものであったのには疑問が残った。例えば、デカルトの有名な弟子であるレギウスが「レジウス」(248頁)となっている。また、ネーデルラント改革派教会の分派であるレモンストラント派が「抗議派」(240頁)となっており、間違いではないものの気になる点ではあった。

現代の初期近代哲学史をリードする研究者によるこの素晴らしい伝記は、本文だけでも500頁を超えており、註・文献表・解題をあわせると全630頁の大著であるが、スピノザの生涯、思想、そしてその政治・文化的文脈を知るにはこれ以上ない文献である。スピノザの哲学に興味をもつ読者に限らず、17世紀のオランダ文化史やユダヤ思想に興味をもつ読者も失望させられることはない。

(加藤喜之)

**ジョージ・ダイソン** (吉田三知世訳)『チューリングの大聖堂—コンピュータの創造とデジタル世界の到来』早川書房、2013年2月、648頁、ISBN 978-4-15-209359-2、定価3,500円+税

まず、タイトルにあるチューリングという名前に惹かれて本書を読むと、失望させられるということを注意しておきたい。本文でチューリング本人が大きく扱われるのは第13章だけで、内容もよく知られた伝記のみだ。また、本文中に「チューリングの大聖堂」という言葉は登場しない。チューリング・テストへの答の一つがサーチエンジンで、グーグルの電子図書館プロジェクトこそが現代の大聖堂だとする、チューリングの問いの現代的な

解釈なのだが、それほど説得力のある議論とは思えない。本書の価値は、フォン・ノイマンが組織したプリンストン高等研究所のプロジェクトについて新たに利用できるようになった資料にもとづき詳細な分析を行ったことにあり、記述の圧倒的な分量もそれに当たっている。

著者のジョージ・ダイソンは、これ以前に宇宙開発やコンピュータ社会を扱う歴史書を書いている。父のフリーマン・ダイソンがプリンストン高等研究所にいた物理学者で、ジョージもそこで子ども時代を過ごしたこと、そして2002-3年に所長特別客員研究員として高等研究所の資料を調査したことが、執筆のきっかけだという。描かれている内容は多岐にわたり、プリンストンの地や高等研究所に関する様々な逸話、初期のコンピュータ開発、高等研究所でのコンピュータ開発、コンピュータを応用した科学的研究、それらが現代に与える影響などである。

高等研究所の開発を詳しく扱った書物としては、ハーマン・H. ゴールドスタイン(末包良太・米口肇・犬伏茂之訳)『計算機の歴史 パスカルからノイマンまで』(共立出版、1979年)とウィリアム・アスプレイ(杉山滋郎・吉田晴代訳)『ノイマンとコンピュータの起源』(産業図書、1995年)がある。ダイソンは「本書の背後にある文書のほとんどは極めて長いあいだにわたって秘密にされたままになっていた」(47頁)とするが、これはやや誇張で、これらの先行する書物と共に資料に依拠するところも多くあり、歴史の概略を大きく変えるものではない。

本書が新たに使用している資料のうち、重要なものは、高等研究所のアーカイブ、クラリ(フォン・ノイマンの妻)の文書、ジュリアン・ビゲロー(プロジェクトの最初の主任技師)の文書、RCA(アメリカ・ラジオ会社)のアーカイブ、そして開発に携わった技術者や装置を利用して研究した科学者たちへの聞き取りである。当事者の言葉をもとに、開発の詳細を、生き生きと描き出しているところが、本書の優れた点だ。ダイソンの調査が行われる前は非公開だった高等研究所のアーカイブは、今は利用可能となったそうなので、今後もさらなる研究が進むことを期待したい。

高等研究所の開発は、これまでのコンピュータ史において ENIAC と EDVAC および UNIVAC と IBM の間に挟まれて、相対的に小さな扱いしか受けこななかった。それに対して、本書では高等研究所での開発の歴史的な意義を、次のように要約している。「産業に縛られることもなく、学問の世界のしきたりからも解放され、米国政府から大々的な支援を受けて、20代から30代の数十名の技術者が、100万ドルに満たない費用と5年に及ばぬ短い時間で、フォン・ノイマンのコンピュータの設計から製作までを行った。」(42頁)そして、開発されたコンピュータの最大の特徴は、高速ランダムアクセス・メモリを使用した点で、これが循環型のメモリである遅延線を用いた EDVAC や EDSAC との違いであり、現在のプログラミングにも引き継がれているとする。

また、この当時の他のコンピュータ開発プロジェクトは軍事用か商業用の目的による秘密のものであったが、フォン・ノイマンは高等研究所のプロジェクトは科学研究を目的とするものであるとして、生み出された概念や技術を出版物によって公開したことの影響にも注目している。「ノイマン型アーキテクチャー」の起源は EDVAC にあるが、実際に普及させたのは高等研究所の一連の報告であり、成果が逐次報告された結果、その設計をコピーした多数のコンピュータが作られ、その後のコンピュータの原型となっていたとする。本書ではこれらについて高等研究所の開発の過程とそこで生まれた技術をていねいに追いかけており、説得力のある記述となっているのだが、歴史的な意義を捉えるにはさらに他の開発プロジェクトと比較し、知識や技術の影響関係を見極める必要があるだろう。

同時に、本書ではフォン・ノイマンのコンピュータへの関心は、水爆製造に向かっていたことも強調されている。例えば、気象予測は高等研究所の電子計算機プロジェクトに最初から組み込まれた重要な課題だったが、フォン・ノイマンにとっては水爆という意図を隠すものと認識されていた。高等研究所で科学を目的に進められた研究をもとに、ロスアラモス等で軍事用のコンピュータの開発と利用を行っていたのである。そして、